



ビーフリード輸液の長時間投与は*Bacillus*属による汚染のリスク因子です。取り扱いやオーダーに注意しましょう。

ビーフリード輸液は*Bacillus*属の増殖に適した組成であることが多く報告されています。今一度取り扱いやオーダーに注意をお願いします。

経口摂取量が少ない患者さんに対して、ビーフリード輸液で栄養を補充する機会は非常に多くあります。しかし、ビーフリード輸液は*Bacillus*属の増殖に適した組成となっており、他の輸液と比較して汚染リスクが増大する事が知られています。

## 【汚染のリスク因子】

### ①混注薬剤の存在

混注作業時、刺入部の消毒・ふき取りを行っていても完全に除菌はできません。そのため、他の薬剤の混注のために刺入部を注射針で貫通するたびに汚染のリスクが高まります。



### ②輸液投与時間

輸液の投与時間が長いと、混注作業時に薬液中に入った細菌が、増殖に適した条件下で多量に増殖します。そのため、輸液とともに多量の細菌が血管内に注入され、菌血症のリスクが上がります。投与時間は6-8時間を限度としてください。



ビーフリード輸液を投与する際は、可能な限り

**単剤 ・ 短時間投与 ・ 清潔な操作**

を心がけるように注意しましょう。

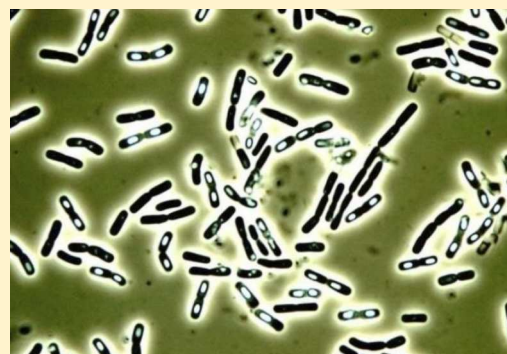
例) ビーフリード輸液 3袋  
24時間で投与 1日1回



ビーフリード輸液 1袋  
8時間で投与 1日3回

## 《バシラス (*Bacillus cereus*) とは》

- グラム陽性桿菌で、環境中や人の常在細菌叢にも存在します。
- 芽胞を形成するため、乾燥や熱に強く、環境中で長期間生存します。
- 病院内ではカテーテル関連血流感染症の起因菌となることが多い。
- 菌血症の際にカテーテルを入れ替えなかった場合、再発率が高くなります。
- バシラス菌血症となった場合は留置カテーテルの交換を行いましょう。



不明な点につきましては、薬剤部・医薬品情報管理室(内線 7083)までご連絡下さい。

(文責：櫻井)